

史跡妙光寺境内調査報告

馬瀬 智光

1. はじめに

今回報告する妙光寺^{みょうこうじ}は、京都市右京区宇多野上ノ谷町、鳴滝宇多野谷町に所在する京十刹寺院である。仁和寺の西、福王子神社の北に位置する。当寺は弘安8年(1285)の創建以来、法灯^{たっちゆう}も塔頭に移ることなく本山として当初の位置に継承されている。このような例は、北区等持院北町に所在する真如寺と当寺のみである。京十刹の歴史と景観を今に伝える稀有な事例であり、平成23年に方丈が京都市有形文化財に、平成24年に境内のほぼ全域が京都市史跡に指定された。

本稿で報告する内容は、妙光寺境内の主要施設の内、現存しない山門^{はつとう}、開山堂、鐘楼の発掘調査成果と、開山墓及び近世再興に尽力した打它家墓^{うだ(うつだ)}に関する調査成果である。特筆すべきは、法堂跡で建物位置を特定する遺構を発見できたこと、開山堂跡で建物規模の復元に加え、参道等の遺構を発見できたことなどである。これらの調査成果をもとにして史跡指定されたため、今回詳細を報告する。

2. 妙光寺略史(表1)

妙光寺は、鎌倉時代に内大臣を経験した花山院藤原師継^{もろつぐ}が長男の右少将藤原忠季^{ただすえ}

(幼名：妙光)の追修^{ついでしゆ}供養のために、仁和寺に近接する別業を「妙光禅寺」としたものである。師継の子で、忠季の弟である花山院師信^{もろのぶ}(後に内大臣に昇進)と弟で僧の心性空岩^{しんしやうくわん}の招聘により、無本覚心^{むほんかくしん}が開山として弘安8年に迎えられた。迎える際には、無本覚心のために寿塔「歳寒」(後に「靈光」と名称が変更される)が建てられている¹⁾。

無本覚心は、信州出身で、嘉禎元年(1235)、29歳の時に東大寺で登壇受戒している。次いで高野山に登り密教を学んでいる。高野山には、栄西の弟子であった退耕行勇^{たいこうぎやうゆう}がおり、彼から禅を学ぶと、建長元年(1249)2月には金剛三昧院^{がんしやう}の願性の援助を受けて入宋し、『無門関』の著者である無門慧開などに師事して、建長6年(1254)に帰国している。願性の縁で、紀伊国由良庄^{ゆらのしやう}で興国寺を開創した法燈派の開祖である²⁾。

妙光寺は至徳3年(1386)に京十刹の第八位になったとされるが、『蔭涼軒日録』延徳3年(1491)2月24日条に、等持寺、臨川寺、真如寺、大徳寺などと共に記述されている³⁾のが確実な例である。

文明10年(1478)4月7日付け足利義政「所領安堵状」⁴⁾があるものの、応仁・文明の乱による荒廃の影響か、『鹿苑日録』明応8年(1499)4月2日条には、寺が仁

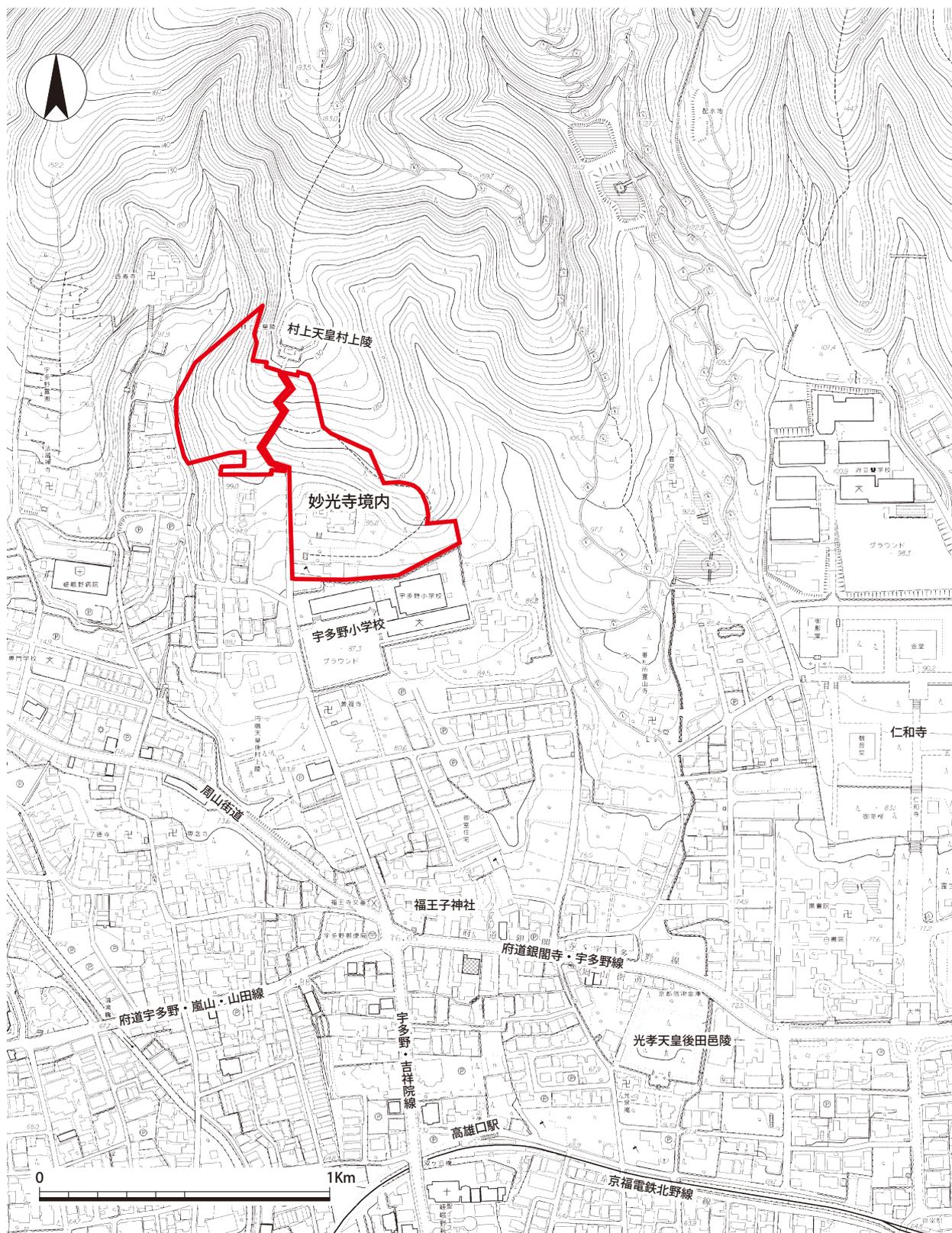


図1 史跡妙光寺境内位置図 (S=1:20,000)

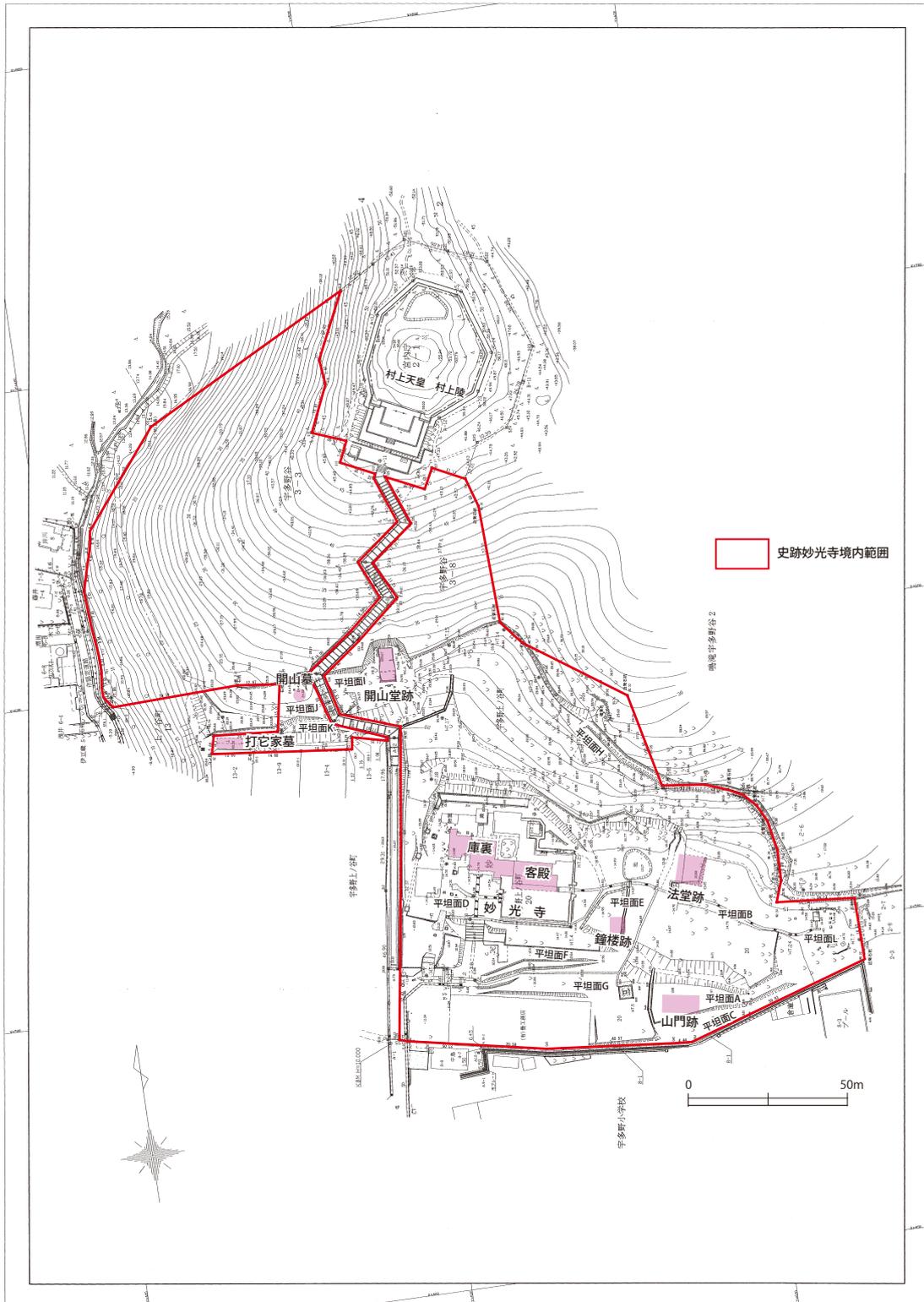


図2 主要施設配置図（妙光寺蔵 羽田測量事務所 2007年4月3日作成図を改変 S=1:2,000）

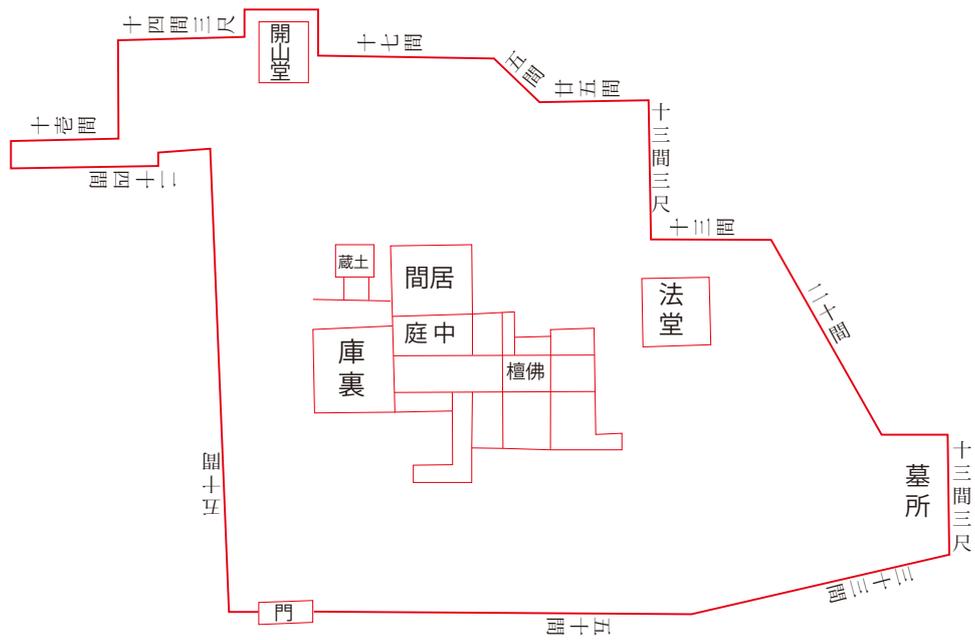


図5 「妙光寺」『寺院明細帳』(明治16年作図)

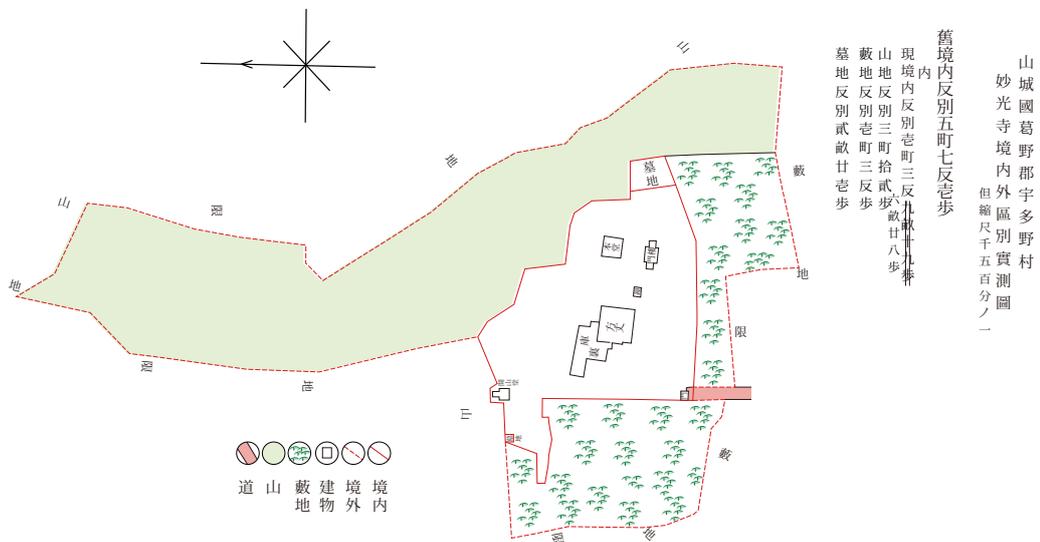


図6 「妙光寺境内外區別實測圖」『社寺境内外區別取調』(明治16年～18年頃作図)

を再建⁸⁾するなど、打它家が復興に尽力している。その後、天保元年(1830)7月2日の大地震で被災するが、同14年から弘化3年(1846)にかけて、了堂慈穩^{りょうどうじおん}により山門などの諸堂が修復されている⁹⁾。

3. 調査日誌抄録

平成22年3月13日 山門跡を手掘りして4箇所掘削したが、現代の廃棄土坑のみ確認。法堂跡では礎石据付穴を2基確認。開

山堂跡を3箇所掘削して、延石を確認した。

平成22年3月20日 法堂跡で基壇表面の清掃及び2箇所の調査区を設定した。

平成22年6月12日 開山堂で表面清掃及び2箇所の調査区を設定し、延石や礎石を検出した。

平成22年7月3日 雨天により測量調査は中止した。鐘楼跡で瓦の表面採集及び住職、責任役員の徳永氏、豊工務店社長からの聞き取り調査を実施した。

平成22年9月11日 開山堂跡の前堂部分に調査区を設定して、前堂の構築状況を確認するとともに、参道を精査した。

平成22年11月13日 開山堂跡後堂に2箇所の調査区を設定して、基壇構築状況を確認するとともに、法堂跡基壇の調査区を再掘削し、断面図作成を行った。

平成23年8月20日 開山堂跡のある平坦地において、軒瓦の分布状況を調査した。

平成23年12月7日 開山法燈円明国師墓・續芳慈胤墓・打它家墓塔群を実測した。

4. 山門跡の調査

(1) 山門跡について

山門跡は、『都名所図会』、「寺地画図」、
「社寺境内外区別取調（絵図）」において、
いずれも法堂の真南に描かれている（図
3・4・6）。現存する法堂基壇のある平
坦面Bよりも約1.7m低い部分に東西約30
m、南北約15m程度の平坦面Aがあり、こ
の部分に山門跡と推定した。

現在、建仁寺の開山堂表門として使われ
ている山門は寛文6年（1666）建立の二層
入母屋造瓦葺建物で、両脇に山廊が付く。
規模は幅3間（約6.2m）×奥行2間（約
3.5m）であり、両脇の山廊を含めると、幅
約15.2mに達する。明治18年（1885）に
建仁寺に移築されている。

(2) 山門跡の調査結果

平成22年3月12日に当該部分に4箇所の
調査区を設定したが、掘削深度内は全て
現代の廃棄土層であった。同年3月20日
に妙光寺の修理を担当している(株)豊工務店
の協力を得て、重機を利用して3箇所の調
査区を発掘した。調査区は平坦面Aの西半
部に設定した1区、平坦面Aと平坦面Cの
境界部分に設定した2区、平坦面Aと平坦
面Bの境界となる斜面に設定した3区であ
る（図2・7・8、写真7～10）。

1区 平坦面Aの現地表面は標高98m前
後にあり、標高97.2m前後で瓦片を含む
整地層④に達する。地表面から整地層④ま
では現代の廃棄土層であった。整地層④上
面で2基の土坑を検出した（図7）。土坑1
は径25cm、深さ約5cmであった。土坑2
も径25cm程度である。平坦面Cに至る斜
面部分に堆積する②層中の大量の近世瓦片
は、山門を明治18年に移築した際に廃棄
されたものとみられる。

2区 瓦を少量含む明黄褐色砂泥の整地層
（⑤層）は、1区の④層と同質である。堆積
状況及び整地層の傾斜角も1区と同じであ
る。

3区 表土直下で瓦を少量含む明黄褐色砂
泥層（⑤層）が認められる。

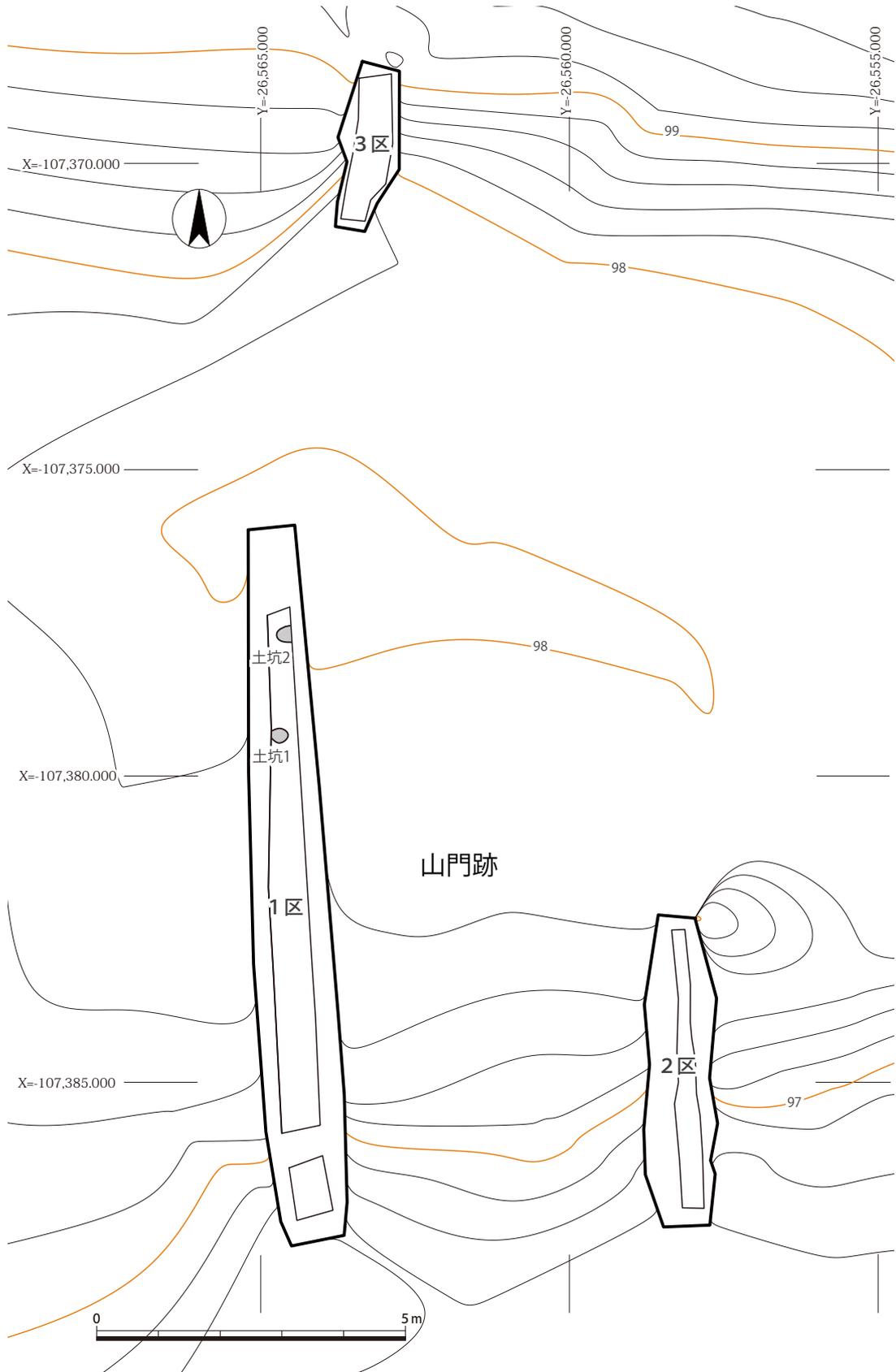


図7 山門跡 調査区位置図 (S=1:100)

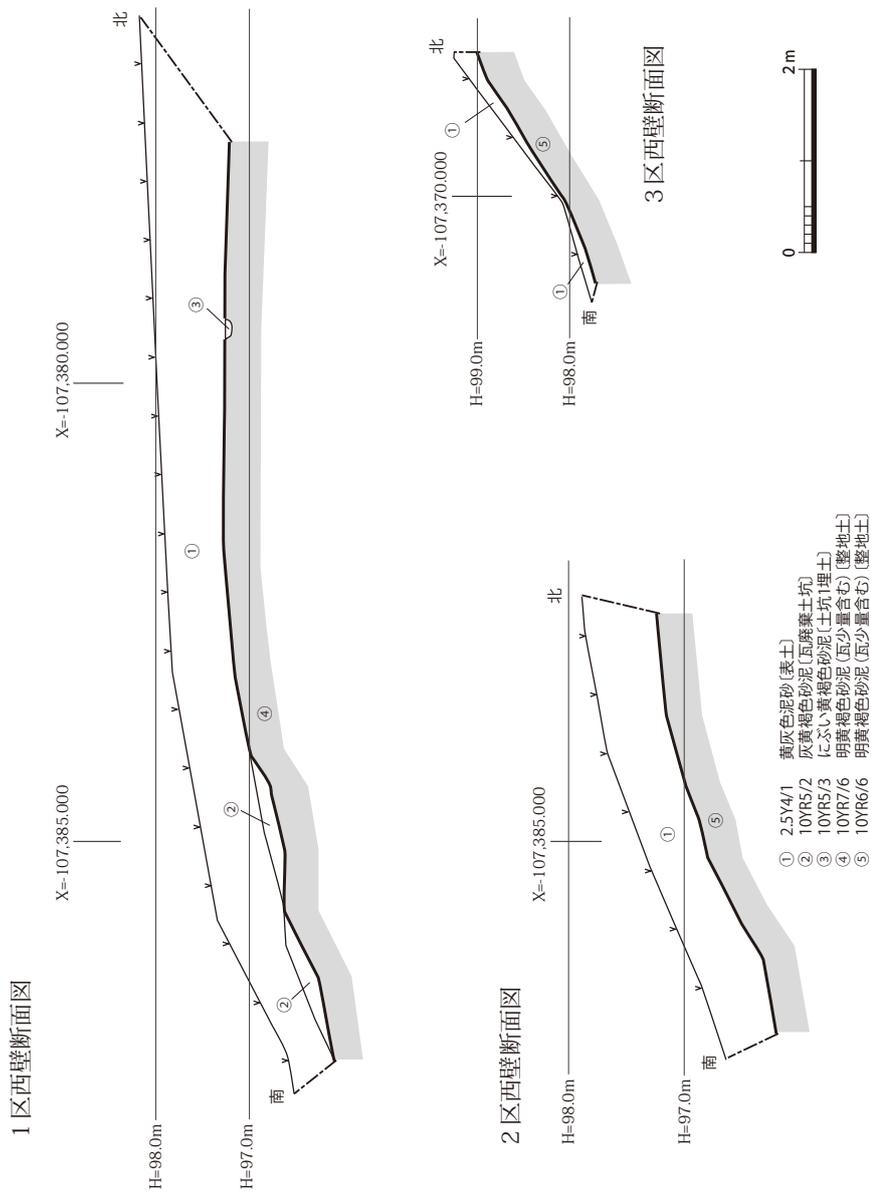


図8 山門跡1区～3区土層断面図 (S=1:80)

1区と2区は山門跡の検出される可能性が最も高い場所であり、山門の基壇に使用されていた資材を含めて建仁寺に移転されたとしても、山門南側の階段、山門と法堂を結ぶ参道等が検出できると期待していたが、明確な痕跡を認めることができなかった。3区は平坦面A、B間で最も等高線が密になる部分であり、階段の存在を考えていたが、その痕跡も確認できなかった。

5. 法堂跡の調査

(1) 法堂跡について

法堂跡は、山門跡で述べた絵図面等から客殿の東側、山門の北側にあったと推定されている。絵図面のとおり、客殿東側に東西約13m、南北約9mの方形基壇状の高まりがある。当該地には、寛永年間に建立され、明治年間に静岡県静岡市清水区の鉄舟

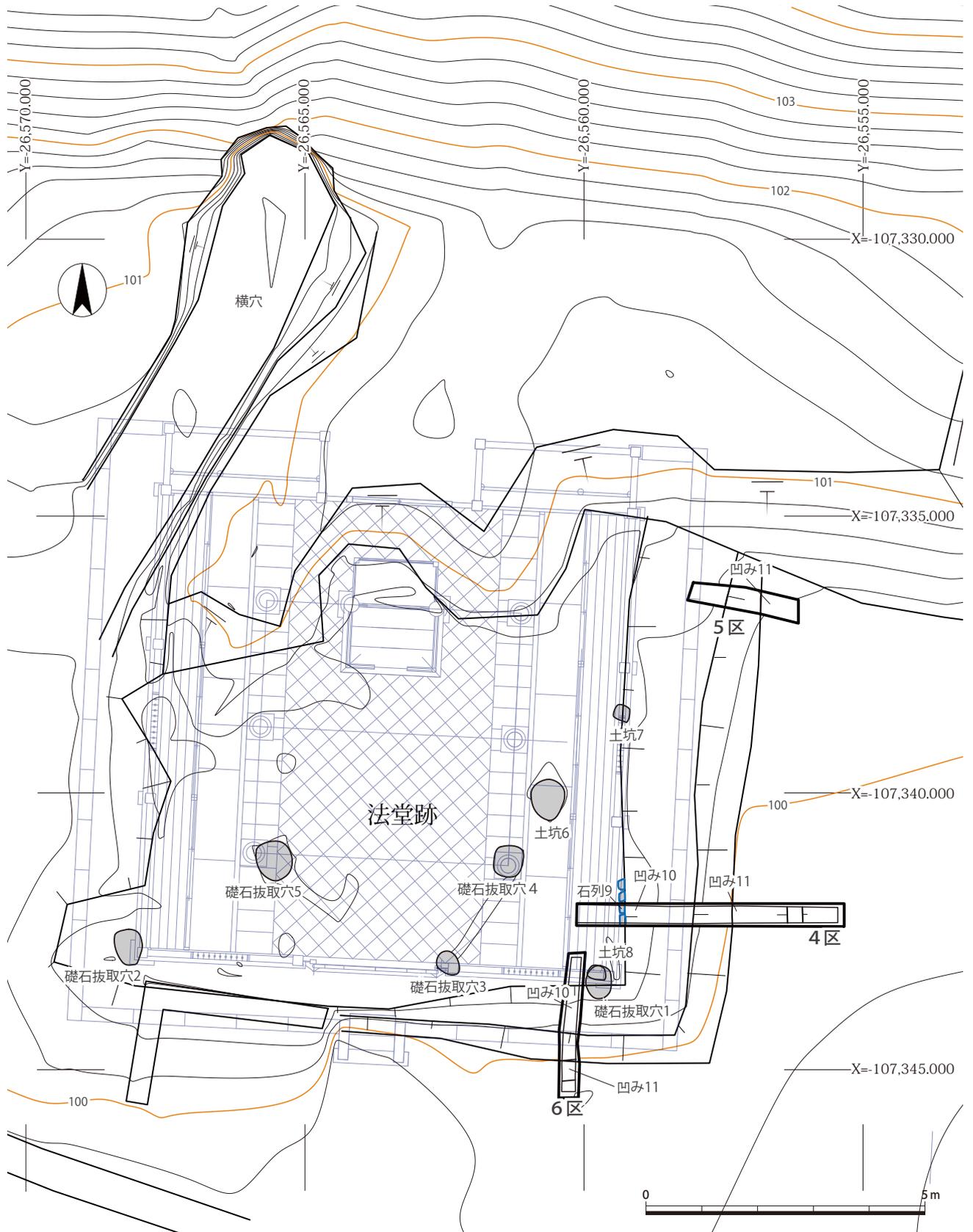


図9 法堂跡 調査区位置図 (青線：法塔復元図, S=1:100)

寺に移築された裳階付入母屋造瓦葺の建物があつたとされる（写真17・18）。

（2）法堂跡の調査結果

法堂跡の調査にあたっては、清水一徳氏が測量した鉄舟寺本堂の平面図をもとに基壇上面の精査を行った。また、基壇の旧態を明らかにするために、東西方向の調査区を2箇所、南北方向の調査区を1箇所設定した。調査の結果、礎石抜取穴を5基、土坑2基、石列1基、凹み状遺構を5箇所確認した。

礎石抜取穴 外陣南側柱部分で3箇所、内陣も南側柱部分で2箇所確認した。外陣の抜取穴は40～70cmの径がある。内陣の2基は60～70cmの径がある。抜取穴の埋土は、5YR4/1～5/1の褐灰色泥砂である。

土坑 土坑6は長径80cmの楕円形である。内陣、外陣いずれの柱列からも外れており、性格は不明である。土坑7は、外陣東側柱列上に乗る径約30cmの隅丸方形の土坑である。埋土は礎石抜取穴と同様の5YR5/1の褐灰色泥砂である。想定の柱位置とは異なるが、束柱等の可能性もある。土坑8は礎石抜取穴1と重なる外陣南東隅柱の位置にある。礎石抜取穴1が据付穴で土坑8が抜取穴の可能性も想定できる。

石列9 基壇東側に一部地表面に露出しながら南北方向に並ぶもので、4石以上で構成される。石列部分に設けた4区の結果から、基壇状遺構の傾斜変換点に径15cm程度の石を据え付けたものであることが明らかとなった。石列の南北延長上に直線状に傾斜変換する部分が存在することから、外陣端部に関連する遺構、例えば「差石」や

「長押土台」の可能性がある。

凹み状遺構 4区～6区で認められる凹みは、基壇状遺構の東側及び南側に見られる傾斜変換部分に一致している。凹み10は、4区の状況から石列9に伴うものと考えられる。

一方、凹み11は基壇状遺構の東端及び南端とほぼ一致している。4区から東側の凹みは幅約120cm、深さ約6cmである。5区から南側の凹みは幅約35cm、深さ6cm程度である。

6. 開山堂の調査

（1）開山堂跡について

岡田孝男氏は寸法は記入していないものの、倒壊以前の内部構造のわかる貴重な図面を残している¹⁰⁾。印金堂とも呼ばれ、板張方丈の歌聖堂と2間4方の拜堂、そして渡り廊からなる。その形態は禅宗寺院における開山堂に通有のものである¹¹⁾。

岡田氏の訪問時には既に失われていたものの、廻り縁（図面では濡縁）が拜堂の周囲に取り付く。戦前の川勝政太郎氏の写真¹²⁾及び明治26年の『京都美術協会雑誌』の「印金堂図」¹³⁾から想定される上部構造は、以下の通りである。

歌聖堂（図11の後堂部分）は、南面する入母屋造瓦葺の平屋建物で、外壁は上部漆喰作り、下部は腰板貼りで東西両面の上端部南端に窓を設けていた。堂の内部は、四畳半の大きさを持ち、四方の壁一面に印金裂を貼り巡らせてあつた。縞の幅1尺5寸程、丈5尺余りのもので、一つ一つ色を変え模様も変えており、色は五色を用い、唐

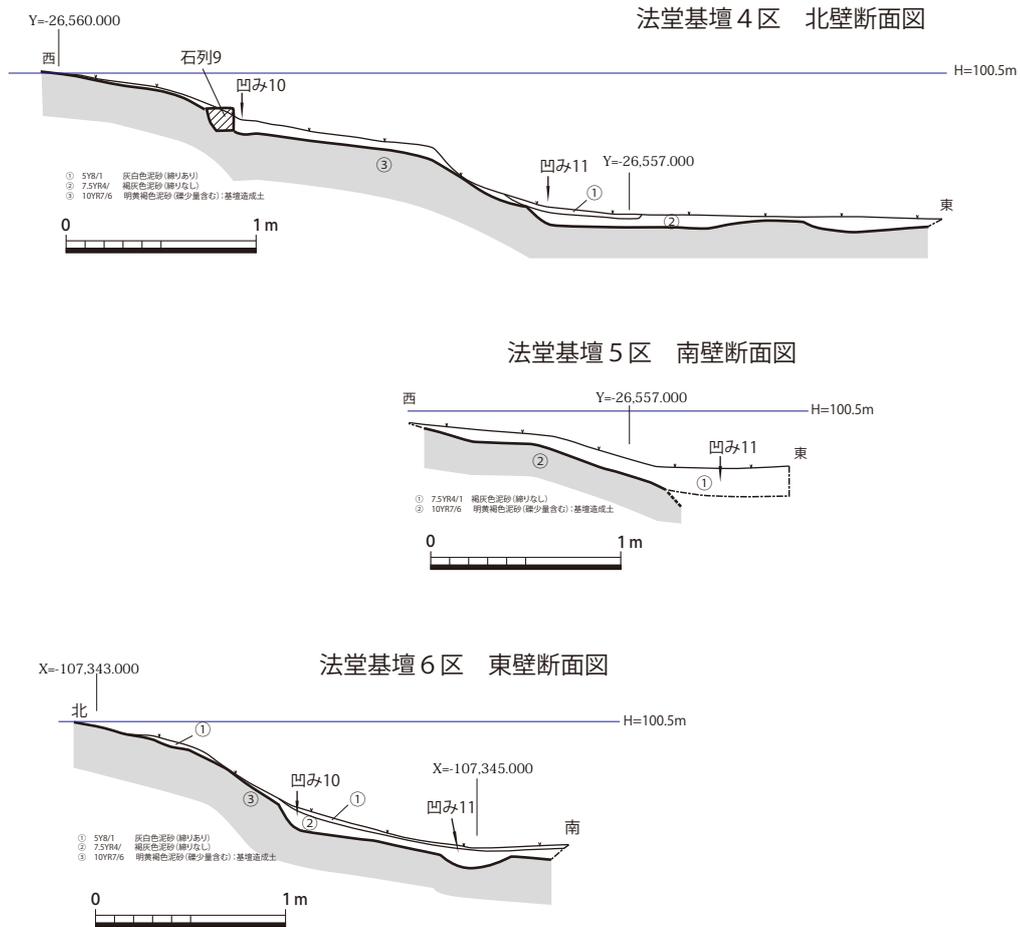


図10 法堂跡 基壇土層断面図 (S=1:40)

草類が大小描かれていたとされる¹⁴⁾。

繋ぎ廊は、切妻瓦葺で上部漆喰作り、下部は腰板貼りである。

拝堂（図11の前堂部分）は、『京都美術協会雑誌』では「南堂」と記述されており、内部は八畳、屋根は東西方向に妻を持つ入母屋造瓦葺の平屋建物で、壁の3方には舞良戸がある。南と東西に縁を持ち、縁には高欄が巡っている。川勝氏の写真にははっきりと階段と基壇の延石が写っている。

開山堂は昭和期に自然倒壊して以後放置されており、遺構検出のための清掃を行うまで、後堂は倒壊時に近い状況、前堂は松

の植林がされていた。前堂中央部分に設定した8区は今回掘削したものではなく、丘陵東方からの雨水を西方の道に導くために掘削されていたものを調査区として利用した。

(2) 開山堂跡の調査結果

調査は、後堂部分に2箇所、前堂部分に4箇所、参道部分に8箇所の合計14箇所の調査区を設定して行った。

後堂部分（図11・13、写真21～24）

現状、平らな部分を上端に据えた石を並べた2段の基壇が残っている。この基壇の構築方法を探るために、基壇南西隅（9区）

と北東隅（10区）に調査区を設けた。

調査の結果、後堂基壇は、地山を削り出した後、赤土で盛土し、内外二重の土壇をそれぞれ石積みで化粧していることが判明した。外側の基壇28は約4m四方の規模をもち、繋ぎ廊の接続する南列に約1.8mの開口部をもつ。内側の基壇27は約3m四方の規模を持ち、繋ぎ廊部分に約1.5mの開口部をもつ。

基壇27は、基壇28の内側約30cmにあり、後堂の支柱礎石（石31～39）及び長押の土台となる石列が四角形に配されたものである。礎石は長押土台の石よりも一回り大きく、容易に識別出来ることから、南北2間、東西2間の柱間を有していたことがわかる。基壇上部及び周辺には開山堂に葺かれていた数多くの瓦が散乱する（写真20）ほか、建築部材も残存していた（写真19）。基壇28の後方、つまり北側の斜面側では2本の竹杭と柱材を検出した（写真22）。この竹杭や柱材の機能は、基壇のほらみを防ぐ目的もしくは開山堂造成面後方の切斜面からの崩落土が基壇に押し寄せることを防ぐ目的があったとみられる。

前堂部分（図11～14、写真24～29）

現状、周囲の地面より約30cm高い亀腹状の基壇の四周に延石が巡り、南面中央に階段が取り付く。表面清掃及び4箇所を発掘成果から、前堂母屋の礎石（石1～9）、廻り縁の礎石（石11～15）の他、前堂母屋の南面中央でも礎石（石10）を検出した。この礎石は、前堂の扉中央を支える床束ではないかと考えられる。さらに前堂の母屋北側、繋ぎ廊の東西両側に脇段が想定されるが、東側の脇段に伴う石16も検出

した。礎石はいずれも自然石で、母屋が大きく、廻り縁の礎石は比較的小さい。廻り縁の礎石の内、南西隅の礎石は昭和40年代以降に取り去られたと考えられる。また、延石は東側の大半、南側東半分、西側の5分の1程度が残存している。8区及び11区で、西側部分の延石抜取り穴を検出している。南側西半部についても、13区の調査で、延石抜取り穴を検出している。

前堂部分は、削りだした地山の上に3つの異なる土（⑦～⑨層）を水平に積み上げ、端部を延石で土留めした亀腹状の基壇である。8区の成果から、延石の後方に暗灰黄色泥砂（⑥層）を積み上げており、亀腹が崩壊するのをふせぐための施工であると考えられる。礎石は基壇が出来てから据え付けられている。

繋ぎ廊（図11）

前堂と後堂を結ぶ繋ぎ廊の礎石は、後堂側（石4・5）、前堂側（石31・32）の両方で確認することが出来た。繋ぎ廊の規模は、南北1間、東西1間である。

階段（図11・14、写真26、28、29）

前堂南側に現存する階段は3段分残存している。1段目は、幅90cm、奥行（踏面）19cm、厚さ18cmの直方体の石材1石である。2段目は幅80cm、奥行（踏面）32cm、厚さ17cm以上の直方体の石材と、幅100cm、奥行（踏面）32cm、厚さ17cm以上の直方体の石材を東西に並べている。3段目は詰石の上に、幅180cm、奥行43cm、踏面32cm、厚さ29cmの断面台形の石材1石を置いている。階段石の東西両側に奥行70cm、幅15cm、厚さ18cm以上の直方体の羽目石を置く。羽目石は参道側

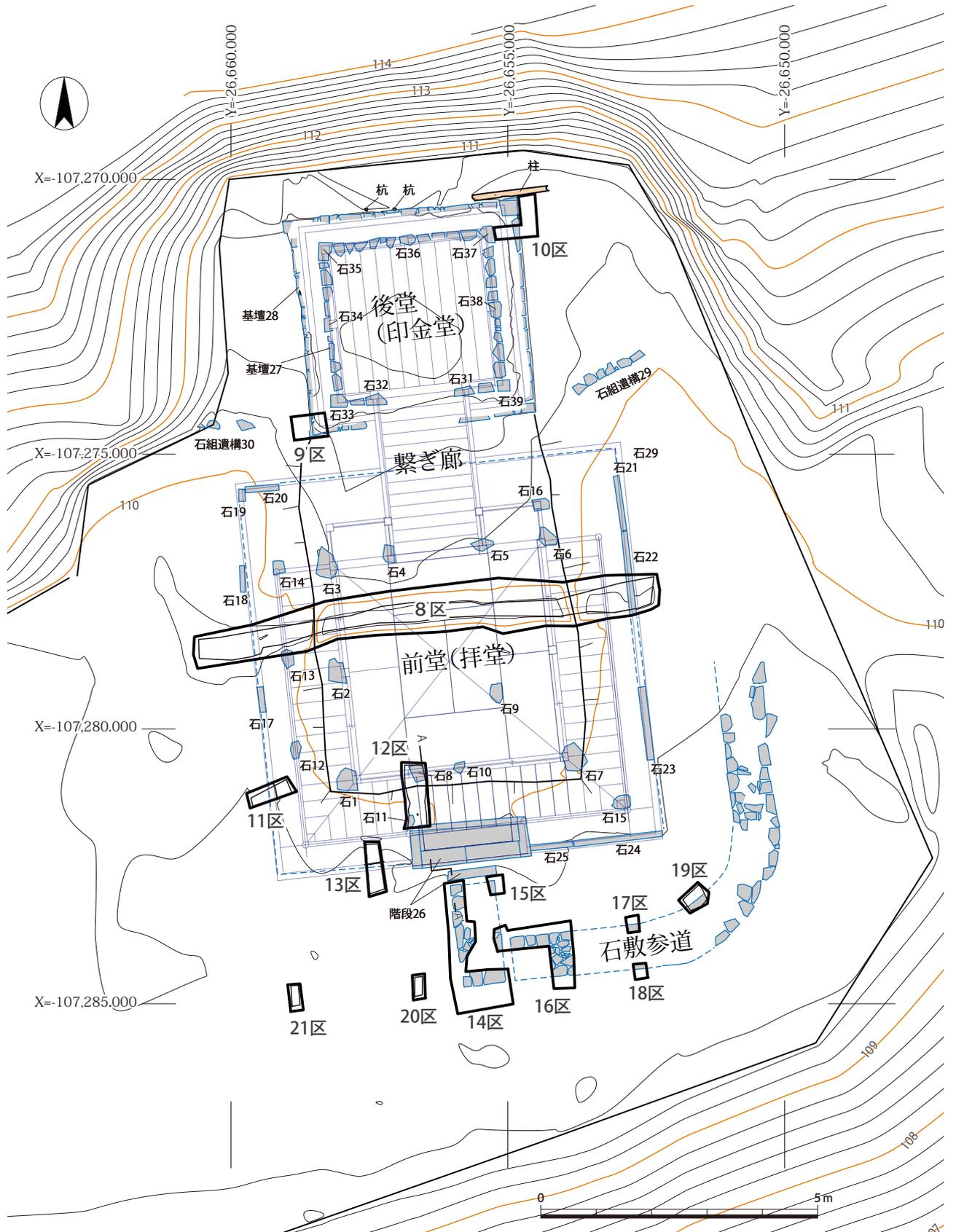


図11 開山堂跡 調査区位置図 (青線：開山堂復元図，S=1:100)

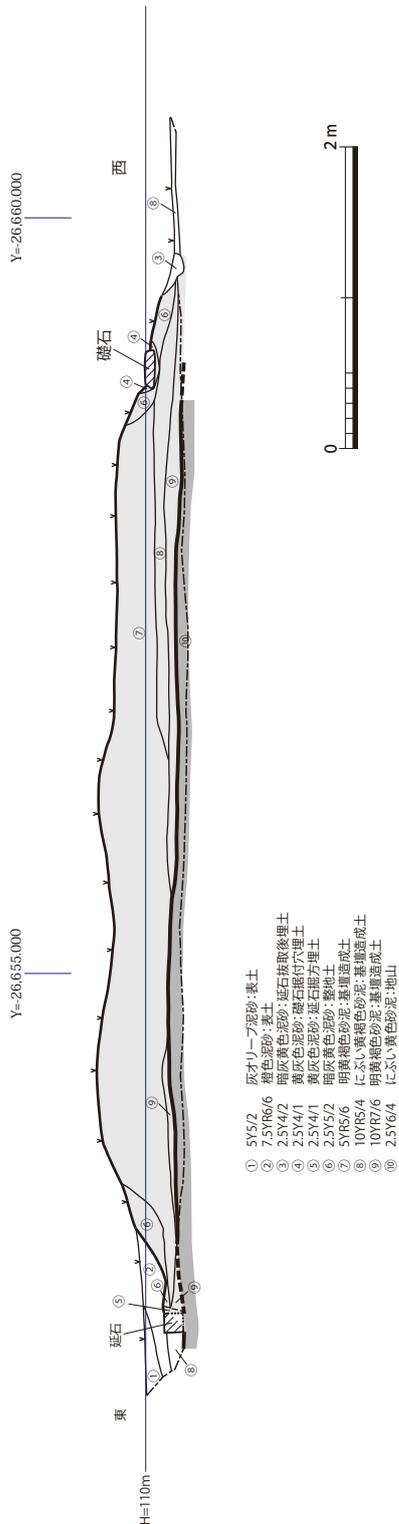


図12 開山堂跡 8区北壁土層断面図 (S=1:50)

の角は垂直な面をもつが、前堂側は角を斜めに仕上げている。

岡田氏、川勝氏の論文に認められないもので、今回の調査によって明らかになった遺構が二つある。一つは座禅石もしくは妙光寺の景勝装置として用いられたと考えられる粘板岩の巨石南側(写真6)から開山堂造成面の東端に至る東西通路を始点とする石敷参道である。もう一つは後堂の東西両側に開山堂とは異なる方位軸をもつ石組遺構である。

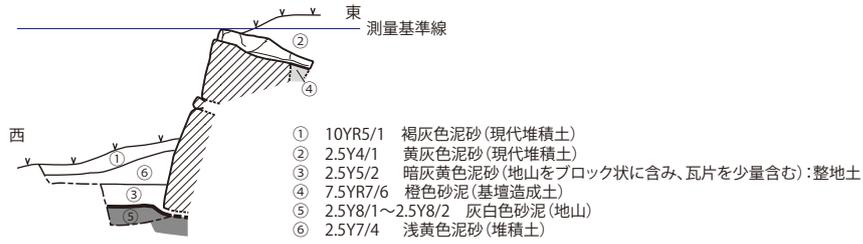
石敷参道 (図11・14, 写真28～30)

石敷参道は平たい部分を上にした不定形の自然石を幅約80cmに並べたものである。参道の両端は綺麗に縁を揃えている。前堂の東側中央付近から始まり、弓なりに屈曲して前堂正面の階段に至る。20区及び21区の調査から、この参道は西側に続かないことがわかった。

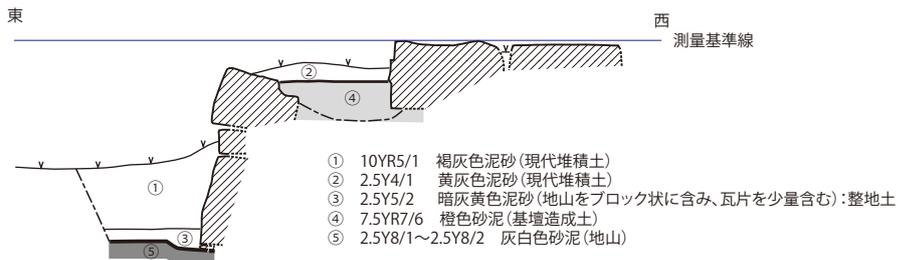
石組遺構 (図11, 写真31)

開山堂の建築方位が真東西から北に約10度傾いているのに対し、石組遺構29は北に約25度、石組遺構30は南に約5度傾いており、方位軸が全く異なっている。残りの良い石組み遺構29が開山堂まで延びないことから、開山堂施工にあたって一部破壊された可能性もある。石組遺構29は長軸20～30cmの自然石を東西方向に6石以上、石組遺構30も同大の自然石を3石以上東西に並べる。

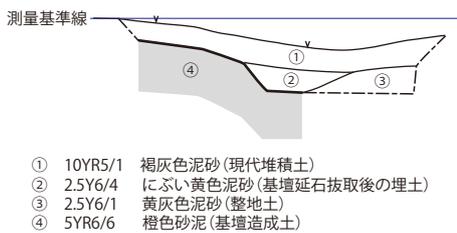
開山堂 9区北壁断面図



開山堂 10区南壁断面図



開山堂拝堂 11区南壁断面図



開山堂拝堂 13区東壁断面図

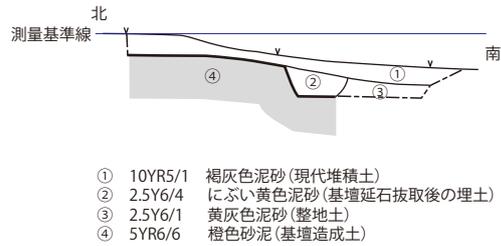


図13 開山堂 土層断面図 (S=1:20)

7. 鐘楼跡の調査

(1) 鐘楼跡について

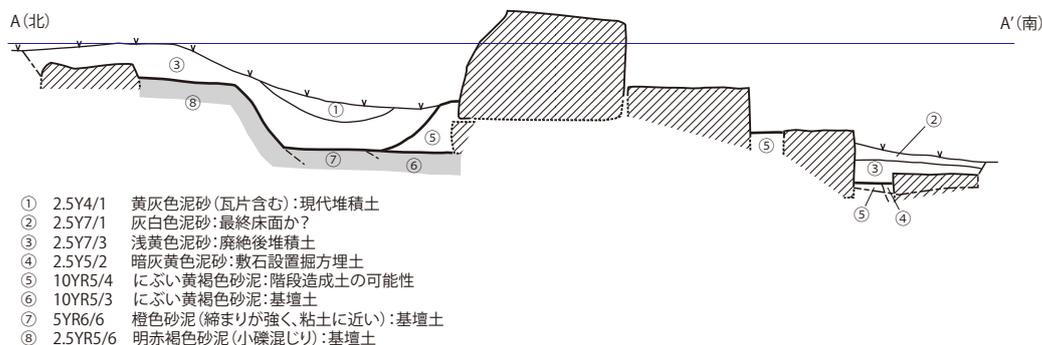
『都名所図絵』にも描かれている鐘楼は、明治3年の「寺地画図」から1間半四方の規模を有していたことがわかる。解体時期は不明であるものの、方丈と山門を結ぶ線の中に位置していた可能性が高い。現状、方丈(客殿)の南東側に東西、南北とも約17m程度の平坦面Eがあり、平坦面Fよりも約1m高い(図2, 写真32・33)。

(2) 鐘楼跡の調査結果

調査は、平坦面Eの南側斜面、平坦面Fとの境界付近に南北方向の調査区を設定して行った。調査区設定にあたっては、平坦面Eで表面に瓦が大量に堆積する部分を鐘楼に近接する可能性の高い場所ととして選んだ(図15, 写真32)。

調査の結果、図16のとおり、表土(①)及び②層には付近にあった施設に伴うと考えられる瓦が大量に堆積していた。③層から⑦層はいずれも北から南に傾斜して堆積

開山堂拝堂 中央階段部分断面図(A-A')



開山堂石敷参道 16区東壁断面図

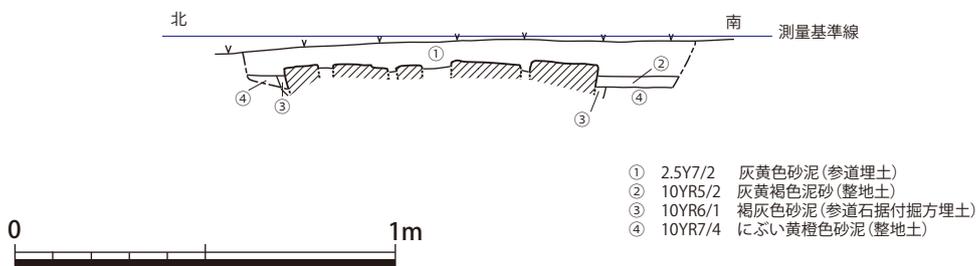


図14 開山堂階段及び参道 土層断面図 (S=1:20)

している。このことは、平坦面Eを造成するために標高の高い北から南に向けて土砂を広げていったことがわかる。しかし、鐘楼に直接結びつく成果は得られなかった。

8. 開山法燈円明国師墓・續芳慈胤墓の調査

開山法燈円明国師墓 開山墓のある平坦面Jは、村上天皇村上陵参道によって開山堂跡のある平坦面Iと隔てられている(図2)。開山墓は、平坦面Jの北端に安置されている無縫塔(図17, 写真34~36)である¹⁵⁾。一辺53cmの方形基壇の上に、断面の形状が六角形で上部に反花文を浮彫にした直径約40cm, 高さ約19cmの基礎, 高

さ約53cm, 最大径約30cmの塔身をもつ。塔身前面に、「開山法燈國師」と線刻されている。塔高は84.5cmある。中世に遡る石塔であるが、当該地に設置された時期は不明である。

續芳慈胤墓 續芳慈胤墓は開山墓塔の南西に近接して置かれた無縫塔(図17, 写真35・37)である。一辺49cmの方形基壇の上に、断面の形状が六角形で上部に反花文を浮彫した高さ約20cm, 径約37cmの基礎石, 高さ約53cm, 最大径約28cmの塔身が置かれている。塔高は96.0cmである。塔身頂部は尖っている。

續芳慈胤は、天明8年(1788)6月26日に住職になり、寛政11年(1799)に建仁寺靈洞院に転住している¹⁶⁾。彼以外の住



図15 鐘楼跡 7区位置図 (S=1:100)

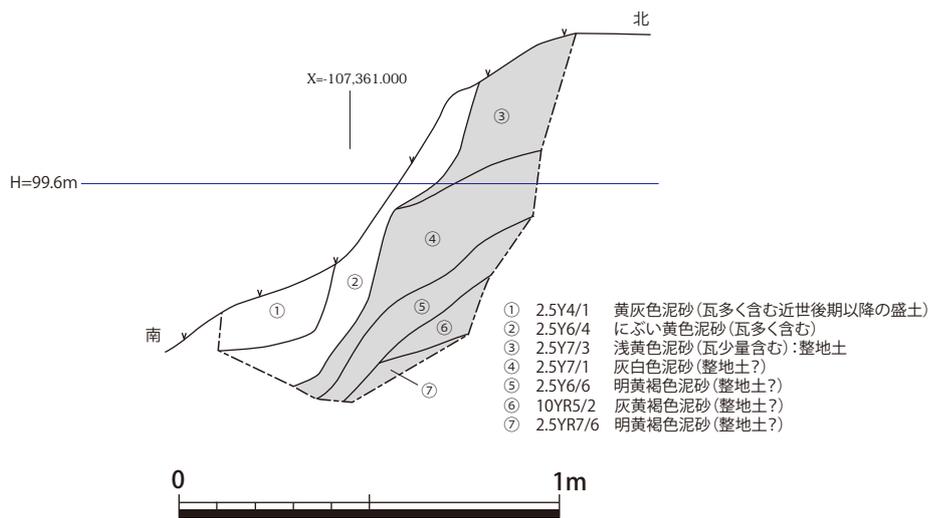


図16 鐘楼跡 7区土層断面図 (S=1:20)

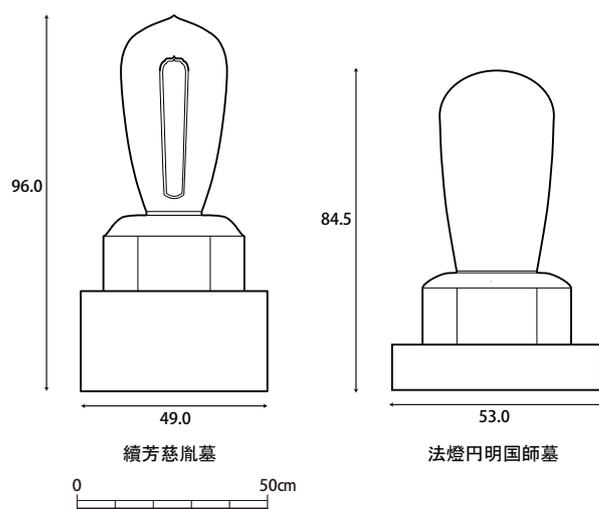


図17 開山法燈円明国師墓・續芳慈胤墓略測図 (S=1:20)

職の墓塔がないことなど未解明の部分が多い。開山塔の位置が当初の位置であるのかどうか検討が必要である。平坦面Jは15m四方の規模を有しており、何らかの建物が存在した可能性もある。

9. 打它家墓の調査

平坦面Kの西端に6基の石塔が認められる(図2・18, 写真37・38)。寛永の妙光寺再興に尽力した豪商打它公軌に関連するもので、西から公軌の父「宗貞」の墓、公軌の母「宗貞妻」墓、打它公軌墓、公軌の息子である「景軌墓」、公軌の妻他2名の墓、氏名不詳2名の墓と続く。6基は宝塔形式で、長方形の石材を組み合わせた基壇の上に、上面に反花文を浮彫にした方形の台座を置く。東端の1基を除き、台座の上には断面形状が角の緩い八角形の塔身が置かれ、塔身の上部に宝珠を頂く笠が置かれる。欠落した宝珠を除いた塔高は、景軌墓が148.5cm、公軌墓が143cmである。打它公軌墓には、「當山再興」、「正保四年丁

亥」、「有力檀越」等の文字が刻まれている(写真39～42)。

東端の1基は、唯一宝珠が残っている。塔身は卵形を呈しており、正面に大きな碑面をもつ。宝珠を含めた塔高は135.5cmあり、女性名の被葬者をもつ2基よりも塔身の最大径、塔高とも大きい。この1基の東側には板状の塔身をもつ墓が2基、自然石を塔身とする墓2基が並ぶ。

10. まとめと課題

京都市指定史跡候補として諮問するために調査した基礎資料について今回報告した。五山十刹と言われる中で、五山については数多くの論考があるものの、十刹について語られることは少ない。妙光寺は真如寺とともに京十刹の中で創建以来の位置を保つ貴重な寺院である。

五山十刹寺院で、開山堂、法堂、山門、鐘楼跡を調査する機会は貴重であり、特に開山堂と法堂では貴重な成果を得た。一方で明治初期まで存続していた山門と鐘楼は

痕跡すら確認することは出来なかった。

法堂は、鉄舟寺に現存する建物の平面図に基づくと、内陣正面（南側）・外陣正面（南側）に沿って礎石据付穴計5基を確認することができた。また、外陣東側に沿って石列を確認したことから、建物位置はほぼ確定できたと考えられる（図19）。一方、法堂北半は後方の斜面からの崩落土や、近代以降に開削されたとみられる横穴の掘削土が積み上げられており、礎石抜取穴等の遺構の確認には至っていない。この横穴により、基壇北西隅から西端部分は削平を受けている。

開山堂は、岡田孝男氏の平面図に寸法は記載されていないが、平面図にほぼ一致する配置で礎石、延石、階段石が残存しており、開山堂の規模を復元することが可能となった。特に石10は前堂の扉中央を支える床束とみられること、石9は屋根を支える構造材ではなく床板の下で根太を支える大引に伴う束柱の礎石とみられることである（図19）。石9は畳の角の位置にあり、開山堂ではないものの、同じ禅宗寺院である大徳寺塔頭黄梅院の畳の配列と床下の礎石構造に近似する（図20）¹⁷⁾。平面図がない状態で建物復元する上で貴重なデータとなる。

また、平坦面Iの規模・形状は参道を含む開山堂の規模・形状に一致させるように開削されたと推定できる（図11）。後堂の輪郭に沿うように「コ」字状に丘陵端部が削平されている。平坦面Iの南岸及び東岸も前堂及び参道の形状に沿う。一方、平坦面Iの西側部分には南北約12m、東西約8mの空地が認められる。開山堂で行われる

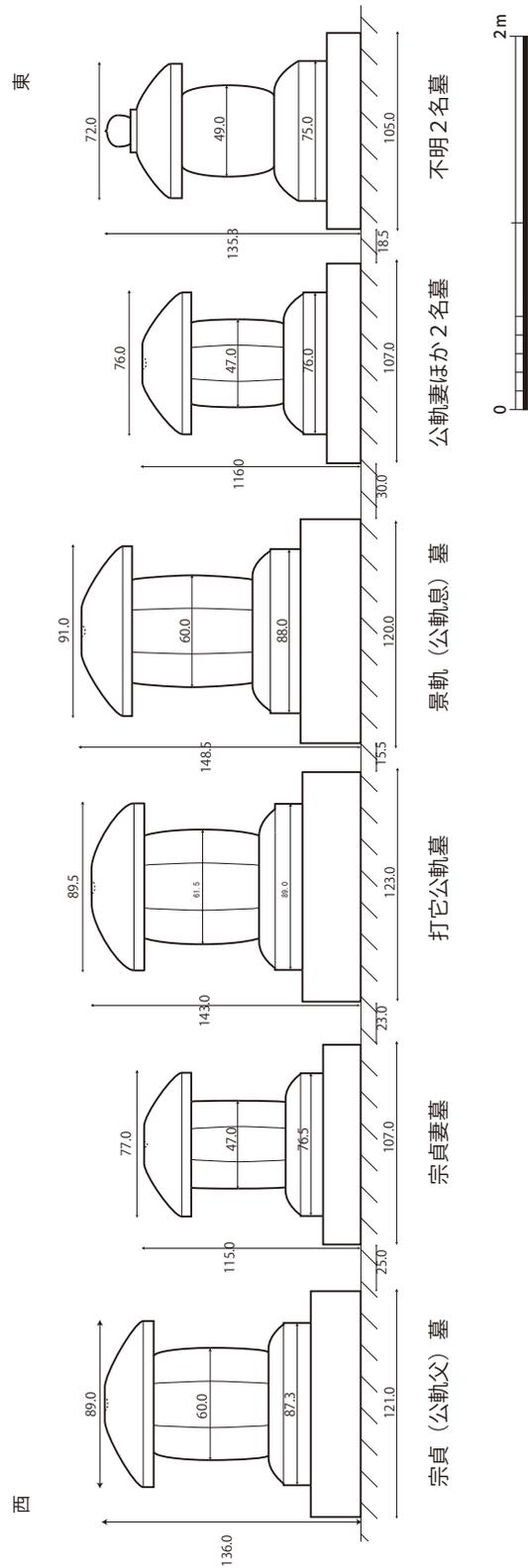
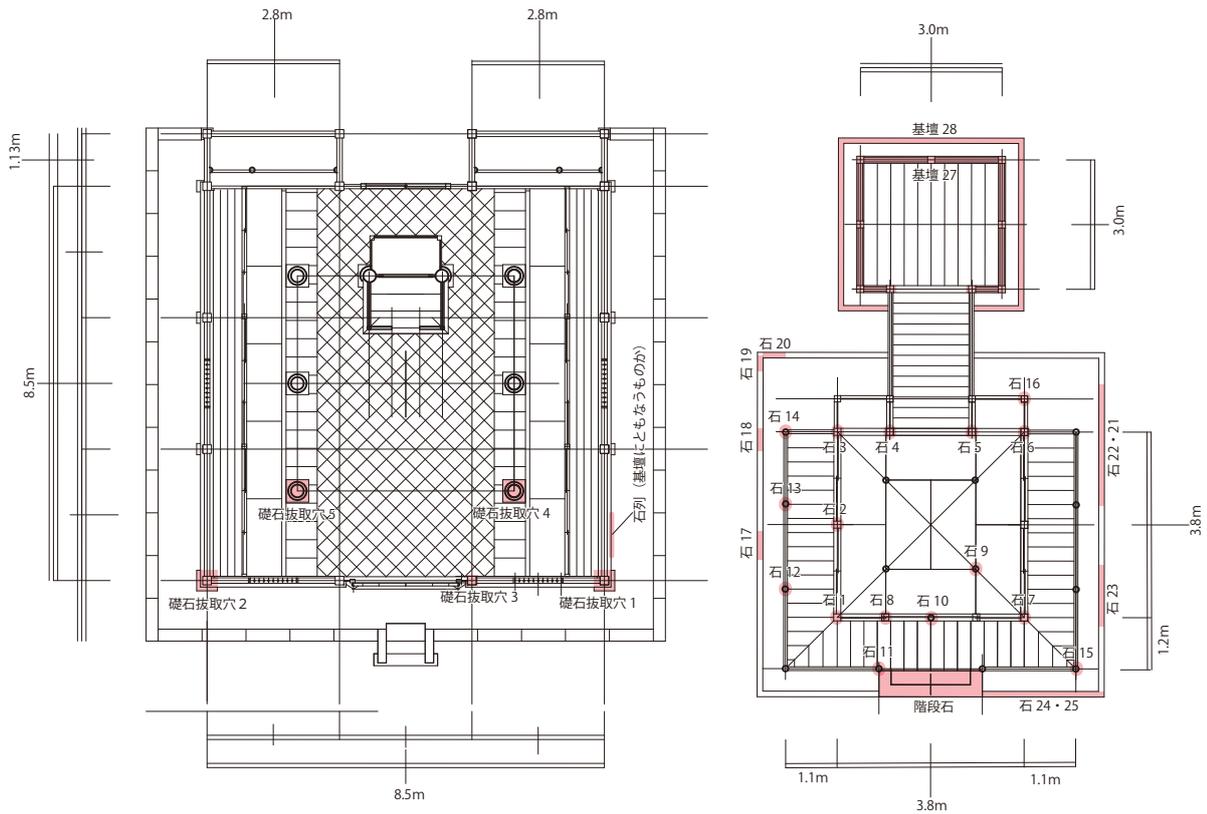


図18 打它家累代墓略測図 (S=1:40)



法堂平面図と検出遺構

開山堂平面図と検出遺構

図19 法堂及び開山堂平面図と検出遺構

儀礼空間であろうか。さらなる調査が必要である。

開山墓のある平坦面Jは、平坦地の規模に比べて、2基の無縫塔が並ぶだけである。開山と天明期の住職以外の石塔は当初より存在しなかったのか、応仁・文明の乱で一時太秦に避難した際に散逸したのか、平坦地J自体が当初からの墓域であるのかを含めた検討が必要である。

以上、十刹寺院である妙光寺の主要建築物と開山墓及び再興に尽力した打它家の墓に関する調査成果を報告した。中世の最盛期において、妙光寺の伽藍は江戸の再興期よりも大規模であったと考えられるため、明確に中世に遡る遺構を確認する必要がある。今後の課題である。

謝辞

本報告を作成するにあたり、以下の方々のご協力を得た。記して感謝したい。(敬称略)

妙光寺住職 芳賀由宗、同責任役員 徳永勲保、宗教法人建仁寺、宗教法人鉄舟寺、株式会社豊工務店、コンピュータシステム株式会社、宮本美津夫、清水一徳

註

- 1) 「鷲峰開山法燈圓明國師行實年譜『續群書類従』第九輯上、續群書類従完成従會、1927年。
- 2) 註1)に同じ
- 3) 「(前略)又十刹。等持、臨川、眞如、安國、寶幢、廣覺、普門、妙光、大徳。々々(後略)」

- 『蔭涼軒日録』延徳3年2月24日条（『増補続史料大成』），臨川書店
- 4) 「妙光寺領所領并塔頭末寺領等目録別紙在事、所返付寺家也、早如元可全領知之状如件、文明十年四月七日「ヲモチニ」東山殿義政公「後之」記 准三宮「判」『妙光雜記』
 - 5) 「(前略) 妙光寺則由良開山所開也。本像者所自開眼也。本地在仁和寺。今移之於大(太)秦寺安井。以構小院安木像也。(後略)」『鹿苑日録』卷4，明応8年4月2日条
 - 6) 「正覚山妙光禪寺紀年集」『靈洞文庫』(妙光寺文書)，寛永14年丁丑条，寛永16年己卯10月13日条
 - 7) 「(前略) 糸屋如雲山庄妙光寺江山越被爲成御見物也、六七町有之也、各携杖而御供申、於妙光寺之山上、風景被遂尊覽御室還御也(後略)」『隔窠記』(『本稿後水尾天皇實録』卷四) 萬治3年3月11日条，2005年
 - 8) 註6) 文献 寛文6年丙午条
 - 9) 註6) 文献 天保元年庚寅条，天保14年癸卯条，弘化3年丙午条
 - 10) 岡田孝男「妙光寺の印金堂と驚月庵」『新住宅』第7号3月号，1952年。
 - 11) 京都府教育庁文化財保護課『京都府の近世社寺建築—近世社寺建築緊急調査報告書—』，京都府教育委員会，1983年。
 - 12) 川勝政太郎「妙光寺と印金堂」『史迹と美術』第12集，1941年。
 - 13) 富岡鉄斎「印金堂圖」『京都美術協会雑誌』第14号，1893年
 - 14) 註13) 文献に同じ
 - 15) 坂詰修一監修『石造文化財への招待』(『考古調査ハンドブック』5)，ニューサイエンス社，2011年。石井進・水藤真監修『石仏と石塔』(『文化財探訪クラブ』8)，山川出版社，2001年。
 - 16) 註6) 文献 天明8年戊申条，寛政11年己未条。
 - 17) 馬瀬智光「大徳寺旧境内」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』，京都市文化市民局，2010年。

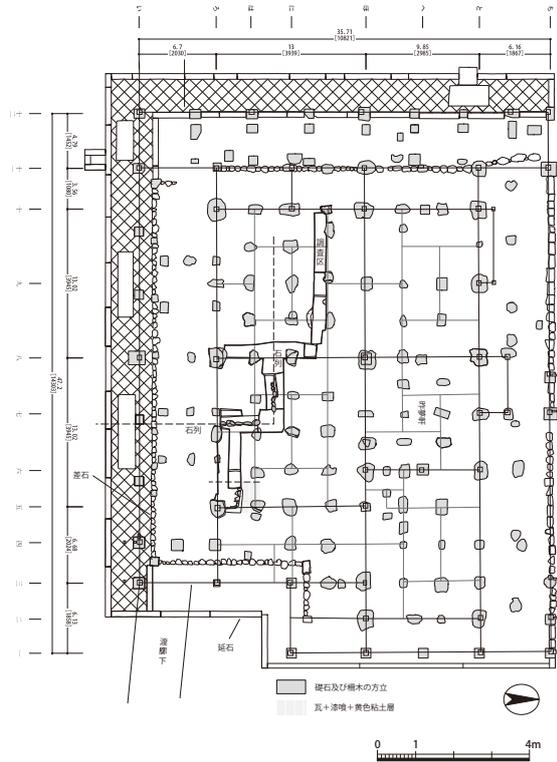


図20 黄梅院書院平面図(註17文献から)

参考文献

- 今津供嶽(編)『正覚山志総説篇』，妙光寺。
 川上 貢『禅院の建築—禅僧のすまいと祭享—』，中央公論美術出版，2005年
 斎藤夏来『禅宗官寺制度の研究』，吉川弘文館，2003年。
 清水一徳『妙光寺客殿調査報告書(京都市右京区宇多野上ノ谷町)』，京都市文化財保護課，2010年。
 続群書類従完成会「鹿苑院公文帳」『資料纂集』第108輯，1996年。
 徳永勲保「妙光寺と印金堂」(草稿)，2004年
 原田正俊『日本中世の禅宗と社会』，吉川弘文館，1998年。
 「臨濟宗建仁寺派 妙光寺」『寺院明細帳』，1883年。

表1-1 妙光寺編年表

和暦	西暦	住職	出来事	参考文献
弘安8年	1280年	法燈円明国師(無本覚心)	藤原師継が長男の右少将忠季(小名妙光)の追修のために北山仁和の別業を妙光禅寺とし、忠季の弟の師信が父命に従い、無本覚心を開山に迎えた。無本覚心のために「歳寒」と呼ぶ壽塔を建てている。	『鷲峰開山法燈円明国師行實年譜』
至徳3年	1386年		妙光寺が京十刹第8位になる。	
長祿4年7月19日	1460年8月5日	原詔西堂	播州實林寺領備前新田庄内吉永保役工米京濟御奉書の件で、等持寺瑞新西堂、廣覺寺徳崇西堂とともに、公文御判する。	『蔭涼軒日録』長祿4年7月19日条
寛正3年8月13日	1462年9月6日	永閻西堂	等持寺原古西堂の入院し、御成御點心があった。まず山門御棧敷において、御聴聞があり、次いで佛殿御棧敷において、祝聖御聴聞を終わる。方丈において御點心をし、御所間において、南禅寺竺峰和尚、筑前國聖福寺妙茂西堂、妙光寺永閻西堂が公帖御判をする。	『蔭涼軒日録』寛正3年8月13日条
寛正5年5月30日	1464年7月4日	貞萼西堂	越中國長福寺法官咸首座、紀伊國興國寺周伯西堂、妙光寺貞萼西堂が御判を行う。	『蔭涼軒日録』寛正5年5月30日条
寛正5年9月3日	1464年10月3日	祖陸西堂	伯耆國充孝寺興雲西堂、妙光寺祖陸西堂、美濃國天福寺聴熙西堂、興聖寺清檀首座、近江國金剛寺梵臺首座、三聖寺有傳首座、御判を行う。	『蔭涼軒日録』寛正5年9月3日条
文明10年4月7日	1478年5月9日		足利義政、妙光寺の寺領及び塔頭末寺領等を安堵する。	『妙光雜記』文明10年4月7日
文明19年8月12日	1487年8月30日		本願檀那伊勢國八田、今は細川上總介殿の被官であるが、妙光禅寺に頼朝公の木造が安置されている理由を問うが、記録がなく由来を説明することができなかった。	『蔭涼軒日録』文明19年8月12日条
長享2年2月23日	1488年4月5日		妙光寺に衛敏西堂が入寺する。	『蔭涼軒日録』長享2年2月23日条
長享2年2月25日	1488年4月7日		妙光寺、天寧寺に入寺書立	『蔭涼軒日録』長享2年2月25日条
延徳2年4月25日	1490年5月14日		妙光寺百年忌につき、公方に書状を遣わす。	『蔭涼軒日録』延徳2年4月25日条
延徳3年2月24日	1491年4月3日		十刹寺院として妙光寺の名前が第八位として載る。等持。臨川。眞如。安國。寶幢。廣覺。普門。妙光。大徳。	『蔭涼軒日録』延徳3年2月24日条

表1-2 妙光寺編年表

和暦	西暦	住職	出来事	参考文献
延徳3年10月12日	1491年11月13日	桂瑞西堂	鹿苑院より妙光寺に入寺する桂瑞西堂に侍衣を送る。	『蔭涼軒日録』延徳3年10月12日条
延徳3年10月24日	1491年11月25日	桂瑞西堂	妙光寺に桂瑞西堂が入寺する。	『蔭涼軒日録』延徳3年10月24日条
延徳3年11月4日	1491年12月5日	桂瑞西堂	桂瑞西堂が妙光寺に入寺したことを公帖に載せる。	『蔭涼軒日録』延徳3年11月4日条
延徳4年6月2日	1492年6月26日		鹿苑院侍衣が諸州十刹位次簿を持ってくる。十刹位次簿には十刹として34箇寺が掲載され、全体の17番目、京十刹として8番目に記載。同日の十刹次第には、46箇寺が掲載され、全体の19番目、京十刹として9番目として記載されている。	『蔭涼軒日録』延徳4年6月2日条
明応8年4月2日	1499年5月11日		妙光寺は元々仁和寺の地にあったが、現在は太秦寺安井に小庵を構え、由良開山(法燈円明国師)が開眼したと云われる木造を安置している。	『鹿苑日録』明応8年4月2日条
天文6年3月16日	1537年4月25日	□□正瑛	□□正瑛が住持になる。	『鹿苑院公文帳(十刹位次簿)』
天文9年8月28日	1540年9月28日		山城国宇治三明寺を文明10年の慈照院御判並びに目録により確認する。	天文9年8月28日付、室町幕府奉行人連署奉書(治部貞兼・飯尾盛純連署、妙光寺雑掌宛)
天文12年5月15日	1543年6月17日		山城国宇治三明寺を文明10年の慈照院御判並びに目録により確認する。	天文12年5月15日付け室町幕府奉行人連署奉書(諏訪長俊・中沢光俊連署、当寺雑掌宛)
永禄2年10月12日	1559年11月11日		北山妙光寺領加賀国石河郡豊田領家職、長田村東西桜田を元のごとく、妙光寺に返すこと。	永禄2年10月12日付け室町幕府奉行人連署奉書(諏訪晴長・治部藤道連署、宛所不明)
永禄4年5月13日	1561年6月25日	玉成慈璇	小侍従局からの申請により、玉成慈璇が住持になる。	『鹿苑院公文帳(十刹位次簿)』
永禄11年4月27日	1568年5月23日	□□宗承	□□宗承が上意により、無佛であるが、住持となる。官資御局不知員數	『鹿苑院公文帳(十刹位次簿)』
元龜2年8月7日	1571年8月27日	□□壽裔	□□壽裔が上意二給賜り、無佛であるが住持となる。曾我申之	『鹿苑院公文帳(十刹位次簿)』
天正5年7月5日	1577年7月20日	慈龍首座	慈龍首座が諸山但馬安国寺住持、十刹妙光寺住持に補任することについて、萬松院殿二十五年忌の功德成による出世を認める書状	7月5日付け鹿苑院瑞超・蔭涼軒宗勤・侍□周保連署、慈龍首座宛書状

表1-3 妙光寺編年表

和暦	西暦	住職	出来事	参考文献
天正5年7月14日	1577年7月29日	虎泉慈龍	萬松院殿の25年御功德により、御判を申請するよにとの書状があった。	『鹿苑院公文帳(十刹位次簿)』
寛永14年8月12日	1637年9月30日		打宅公軌が建仁寺靈洞院の所管の北山妙光寺屋敷並びに山藪の再興と管理をまかされる。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
寛永14年8月21日	1637年10月9日	三江和尚	才林西堂遷化、三江和尚継住	『正覚山妙光禪寺紀年集』
寛永16年10月13日	1639年11月8日	三江和尚	妙光禪寺再建、開山法燈円明国師忌を降魔室において行う。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
正保4年3月14日	1647年4月18日	三江和尚	打宅公軌死去、驚月庵香林良亭居士と号す。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
慶安元年9月13日	1648年10月29日	三江和尚	打宅景軌が妙光寺の永代檀那となすことを常光大和尚に約定。妙光寺山のうち、西の方3分の1は、驚月庵へ永代地として除くが、それは良亭遺骨と祖父宗貞の遺骨を納めた石塔を建置く打宅一門の墓とするためである。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
慶安3年8月23日	1650年9月18日	雲菴覚英	三江和尚遷化、雲菴覚英継住	『正覚山妙光禪寺紀年集』
万治3年3月11日	1660年4月20日	雲菴覚英	後水尾院が仁和寺行幸の折、糸屋如雲の山荘である妙光寺へ山越えし、御成御見物をする。六七町あった。各々杖を携え、お供し、妙光寺の山上にて風景を御照覧された。	『隔篋記』3月11日条(『本稿後水尾天皇實録』巻四)
寛文6年	1666年	雲菴覚英	打宅景軌により山門が再建落成される。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
天和2年2月19日	1682年3月27日	乙檀西堂	雲菴覚英遷化し、乙檀西堂が継住	『正覚山妙光禪寺紀年集』
元禄3年11月2日	1690年12月2日	乙檀西堂	打宅十兵衛雲泉が驚月庵並びに山藪一式を預かるとともに、妙光寺のことも管理することを約定する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
元禄9年11月21日	1696年12月15日	東明覚沅	乙檀西堂遷化、東明覚沅継住	『正覚山妙光禪寺紀年集』
享保6年8月22日	1721年10月12日	東明覚沅	打宅十右衛門死去、實乗院觀海雲泉居士と号す。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
享保20年3月24日	1735年4月16日	東明覚沅	東明覚沅へ建仁寺の公帖降下、驚月庵建物を移して居間書院とする。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
元文4年10月29日	1739年11月29日	東明覚沅	東明和尚、建仁寺へ再住開堂する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
宝暦8年9月16日	1758年10月17日	海山覚遷西堂	東明覚沅遷化し、海山覚遷西堂継住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
安永7年2月7日	1778年3月5日		海山覚遷西堂遷化	『正覚山妙光禪寺紀年集』
天明8年6月26日	1788年7月29日	續芳慈胤	蔗菴遷化し、續芳慈胤継住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』

表 1-4 妙光寺編年表

和暦	西暦	住職	出来事	参考文献
天明8年	1788年		建仁寺御朱印のうち、高四石六斗七升を有し、歳寒菴等塔頭3菴を所有。	『建仁寺末寺帳』
寛政11年	1799年	景和竺應	續芳西堂靈洞院へ轉住し、景和竺應繼住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
文化元年	1804年	全室慈保	景和和尚隱居し、全室慈保繼住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
文化8年	1811年	全室慈保	印金堂開帳	『正覚山妙光禪寺紀年集』
文政5年	1822年	静菴慈恬	全室西堂靈洞院へ轉住し、静菴慈恬繼住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
文政9年	1826年	静菴慈恬	従前、板屋根の小屋組を取り替え、瓦屋根に改める。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
天保元年7月2日	1830年8月19日	静菴慈恬	大地震	『正覚山妙光禪寺紀年集』
天保2年4月4日	1831年5月15日	了堂慈穩	静菴和尚遷化、了堂慈穩繼住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
天保14年	1843年	了堂慈穩	了堂が諸堂を修復する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
弘化3年	1846年	了堂慈穩	山門並びに諸建物修復	『正覚山妙光禪寺紀年集』
文久2年3月4日	1862年4月2日	天章慈英	全室和尚遷化、了堂が靈洞院へ轉住し、天章慈英繼住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
明治4年7月9日	1871年8月24日	徳峯慈旺	天章慈英遷化し、徳峯慈旺繼住する。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
明治5年2月15日	1872年3月23日	徳峯慈旺	検地の上、現境が上地される。	『正覚山妙光禪寺紀年集』
明治16年9月	1883年9月	常澄文嶺	本堂、庫裡、書院、居間、玄關兼扣所、唐門、土蔵、鐘楼、小屋、山門、惣門が現存する。	『寺院明細帳15 葛野1』



写真1 妙光寺境内正面（南西から）



写真2 妙光寺 門（西から）



写真3 妙光寺 庫裡（南から）



写真4 妙光寺 方丈（南東から）



写真5 妙光寺 方丈（南から）



写真6 妙光寺 座禅石？（南から）



写真7 妙光寺 山門跡1区及び3区 (南から)



写真8 妙光寺 山門跡1区西壁 (南東から)



写真9 妙光寺山門跡 2区 (南から)



写真10 妙光寺山門跡 3区 (南東から)



写真11 建仁寺開山堂山門 (旧妙光寺山門)



写真12 建仁寺開山堂山門 (旧妙光寺山門)



写真13 妙光寺 法堂跡（南西から）

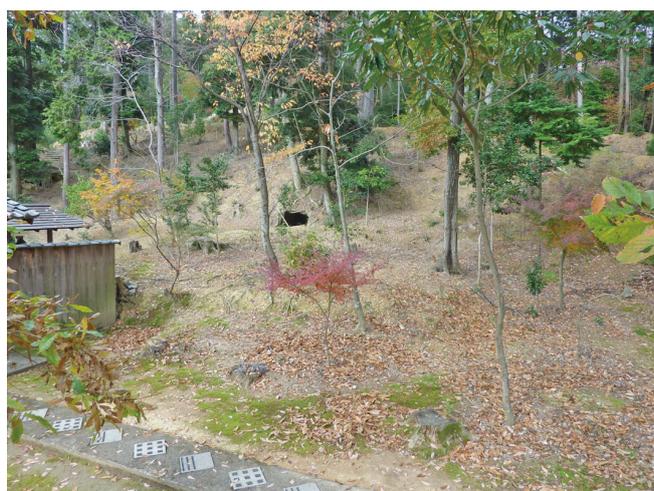


写真14 妙光寺 法堂跡（南東から）



写真15 妙光寺 法塔跡4区（東から）



写真16 法堂跡6区（南西から）



写真17 鉄舟寺本堂（旧妙光寺法堂）（清水一徳撮影）



写真18 鉄舟寺本堂（旧妙光寺法堂）（清水一徳撮影）



写真19 妙光寺 開山堂跡前景（北から）



写真20 妙光寺 開山堂跡後堂基壇瓦散布状況（南から）



写真21 妙光寺 開山堂跡後堂基壇10区（東から）



写真22 妙光寺 開山堂跡後堂基壇10区（東から）



写真23 妙光寺 開山堂跡後堂基壇9区及び前堂北西部延石（西から）



写真24 妙光寺 開山堂跡後堂基壇9区（西から）



写真25 妙光寺 開山堂前堂及び参道（南東から）



写真26 妙光寺 開山堂前堂礎石・延石・階段（南から）



写真27 妙光寺 開山堂前堂8区東端延石22（北から）



写真28 妙光寺 開山堂前堂階段及び参道12・14・15区（南から）



写真29 妙光寺 開山堂前堂12区及び階段（西から）



写真30 妙光寺 開山堂参道16区（北から）



写真31 妙光寺 開山堂後堂及び石組遺構29 (東から)



写真32 妙光寺 鐘楼跡雛壇造成 (南東から)



写真33 妙光寺 鐘楼跡雛壇造成 (西から)



写真34 開山法燈円明国師墓・續芳慈胤墓区画 (南から)



写真35 開山法燈円明国師墓 (右)・續芳慈胤墓 (左)



写真36 開山法燈円明国師墓 (南から)



写真37 妙光寺 打它家墓塔群 (南東から)



写真38 妙光寺 打它家墓塔群 (西から)



写真39 打宅公軌墓塔 (南から)



写真40 打宅公軌墓塔「正保四年丁亥」



写真41 打宅公軌墓塔「有力檀越」



写真42 打宅公軌墓塔「當山再興」